断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑨

高橋 基

―神楽と神楽岡の名称(下)―

前回まで、明治二十五年二月四日に設置された「神楽村」の村名の由来は、アイヌ語地名の「ヘッチェウシ」の意訳で、村名が誕生してから、神楽村にある岡(丘)の意味で、「神楽岡(丘)」の名称となったこと。その神楽岡は、明治二十四年時点では、離宮造営予定地で、アイヌ語地名の「ナヱオサニ」の名称があり、高さ約百十尺(標高約百五十㍍)の地で、東北は眼下に忠別川が流れる絶壁…という条件から、大正十三年に遷宮した上川神社境内であることを明らかにした。**写真①**は、上川神社境内の史跡上川離宮予定地標柱である。

他方、「ヘッチェウシ」は、第二代北海道庁長官の永山武四郎が、明治二十一年九月二十四日にこの地を巡検し、丘山(ナヱオサニ=神楽岡)に登る前に、通過した高台(標高約百十五㍍~百二十㍍の現・神楽二条十一丁目~十三丁目周辺)である。

写真①上川神社境内の史跡上川離宮予定地標柱

元来、アイヌ語地名の「ナヱオサニ」と「ヘッチェウシ」は、異なる地点であったが、「ヘッチェウシ」が、「ナヱオサニ」の地に取って代わって、「神楽岡」の地名起源とされるようになった。その先駆となったのが、明治三十年から三十三年まで、初代上川支庁長を務めた林顕三の著書『北海誌料』(明治三十五年刊)の記事で、その後は、これが踏襲されたのであった。

「旭川村開村の謎」で、松井恒幸氏は、嵐山同様に、京都にある神楽岡に因んで、神楽岡と命名したのは、岩村通俊としている。確かに、京都には、一般的には吉田山と言われている所に、旭川同様に、**写真②**のように、神楽岡がある。しかし、林顕三は『北海誌料』で、「明治三十四年六月、御料局長岩村男爵当地巡回ニ際シ、旭川町有志集合全局長ヲ神楽ケ岡ニ迎ヘタル時、神楽ケ岡ヲ『旭ケ岡』ト改称スル旨伝ヘラル。爾来『旭ケ岡』ト称ス」と書いた。岩村通俊は、『大日本地名辞書』(続編序)で、「近文」の命名は明言しているが、「神楽岡」については全く言及していなし、林顕三の記述から、岩村が神楽岡と命名したのであれば、自ら旭ケ岡と改称の提案はしなかったであろう。

写真②標高121㍍で麓には吉田神社がある

また、『旭川市史』や『永山町史』で、永山武四郎の短歌…「上川の清き流れに身をそそぎ 神楽の岡にみゆき仰がん」…これは、明治二十一年九月の上川入りの時の「即詠」とある。しかし、これまで見てきたように、この時点で神楽岡の名称はなかったし、もし、永山武四郎が意識をしていたとしたら、「北京建議」に「忠英山」ではなく、当然、「神楽岡」が使用されていたであろう。明治二十四年六月の侍従片岡利和(かたおかとしかず)の巡視の際も、北海道毎日新聞の記事では、「御料地の見込みなる字ナイヲオサニ」というアイヌ語地名をそのまま表記しているのであった。

なお、本稿の詳細については、本年末刊行の『アイヌ語地名研究十一号』に掲載予定ですので、参照いただければ幸いです。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します